

Dacha Community

ネットワークダーチャの例

ロシアでは200軒とか300軒といった数多くのダーチャが集合してひとつのダーチャコミュニティを形成し、自治を行ないながら「**共同のメリット**」を享受している。

日本では、それだけの数を包含できるような敷地は望くべくもないし、ある程度まとまった土地が見つかったとしてもそれが農地であればそこに建物は建てられない。

ならば、全国いたる所で急速に増えていて社会問題にもなっている「**空き家**」と「**耕作放棄地**」をネットワークすることで、仮想的にダーチャコミュニティができないだろうか？…との発想から生まれたのが「ネットワークダーチャ」の考え方だ。

里山・里地の復活を考えた時、空き家利用、放棄農地利用をするネットワークダーチャの考えの方が、新たな開発をかけるよりもよほど役に立つ。

- 中核となる施設…共同農場…は必要であり、そこを中心としての自治組織をつくるのが一番現実的である。
- 周辺に点在するダーチャもコミュニティの一員とする。
…それは空き家利用であっても、新築であっても良い。
- 共同農場では、農作業講座やイベント・集会等を実施。
…周辺ダーチャからも参加して頂く。
- 管理人は共同農場の管理をするだけでなく、周辺ダーチャの巡回も行う。
- コミュニティ内では耕作機械、農機具等を共有できる。
- 共同購入によるメリットも出てくる。
- 要請に応じて指導者を周辺ダーチャに派遣もする。
- コミュニティ内の作物は物々交換等で融通しあう。
- その他、自治組織としての独自のルールをつくり、遵守をうながす。

